

三度目の「伊江親方日々記」

豊見山 和行
(琉球大学名誉教授)

かつて大学院生の頃に、平安中期の藤原実資の「小右記」(978~1036年)、戦国期の前関白・九条政基の「政基公旅引付」(1501~1504年)、近世初期秋田藩士の「梅津政景日記」(1612~1633年)などを史料講読や院生仲間との自主ゼミで読む機会があった。日本史を私日記から広く学ぶことと、もうひとつ思惑があった。学部生時代に比嘉春潮の『蠹魚庵漫章』(1971年)に収められた「御三代伊江親方日々記」に接し、その内容に興味をかき立てられた記憶があった。将来、琉球の私日記を読み解く前提として、日本の日記を意識的に読んでみたいと考えていたからである。

帰沖後、当時浦添市立図書館で開催されていた沖縄歴史研究会(古文書講読会)で「伊江親方朝睦日々記」を取り上げてもらった。会員仲間とともに1991年から約3年をかけて、日記全体をなんとか通読することができた(1993年6月29日)。朝睦日記との最初の本格的な取り組みとなった。幸いにも研究会で解説した筆耕データをもとに、小野まさ子さんの尽力によって『沖縄県史資料編7 伊江親方日々記』(1999年)として公刊された。上段に影印、下段に翻刻文が配置され、草書体の初学者にも恰好のテキストに仕上げてもらった。

奉職していた琉大教育学部の1999年度の琉球史史料講読において、沖縄県史版をテキストとした。二度目の取り組みである。家政教育の金城須美子先生とゼミ生も受講していた。そのため朝睦本人の病中日記と、息子朝安の妻(真加戸)に関する看病日記を中心に読解を進め、

2001年11月2日に読了した。朝睦と真加戸の養生食をテーマにしたレベルの高い卒論を仕上げる学生もいた。日記に出てくる「御菓子」の研究と復元をテーマとする卒論もあった。復元された「御菓子」を試食するという得がたい体験もできた。食材や漢方薬、食養生、そして食文化に関する知識と実感にひどく乏しかった身にとって、金城先生からのご教示は新鮮で、毎回、蒙を啓かれる思いであった。

そして、今回琉球文学大系全35巻の一冊に朝睦日記が加えられた。新型コロナウイルスによるパンデミックによって、これまで当たり前であった対面による研究会方式は不可能となった。代替措置としてオンラインによる研究会を週に一回、昨年(2022)5月10日から開始し、現在にいたっている。三度目の取り組みである。

比嘉春潮は、先の「御三代伊江親方日々記」において、次のように締めくくっている。

伊江親方の『日々記』と『老後家中記』に私は何を期待しているか。私はいいたい。それは当時の沖縄の文化、沖縄の歴史の研究にとっての第一級の資料であると。私は同志の協力を得てこれを正確に解説し詳細な註を付して「総地頭伊江親方朝睦の生活記録」を編述して見たいと考えている。

比嘉によるこの一大計画は残念ながら幻に終わった。比嘉ほどの知識と見識を持ち合わせてはいないが、現在参加している仲間とともに比嘉の宿願を果たしたいと考えている。

次世代へ繋ぐ大事業

砂川 昌範
(名桜大学学長)

名桜大学の『琉球文学大系』編集刊行事業は、沖縄県の高等教育機関が果たすべき役割として理事会の全会一致で承認され、2019年4月に最初の一步を踏み出した。待ち望まれていた琉球文学大系(全35巻)の第1巻『おもろさうし・上』が令和4年3月31日に刊行され、続いて第14巻『組踊・上』、第11巻『琉歌・上』が刊行された。当初の計画では年間3から4巻を刊行するため、順調に進めば2030年度には全巻が刊行されることになる。その間、学長も理事長も交代するが、大学の重点事業として確実に継承しなければならない。一方で、カウンターパートの「ゆまに書房」が産学連携長期プロジェクト事業として協力を賛同してくれたことは、本事業の安定運営に大いに貢献している。

地方公共団体が設置・管理する公立大学の存在意義は、地域における高等教育機会の提供と、知の拠点として地域における社会・経済・文化の維持・発展に貢献し、地域創生に資することである。この責任を果たすため、中期計画を作成し、その目標達成に向けて取り組んでいる。令和4年度から始まった第三期中期計画では、Missionとして、「地域創生に関する目標」を最初に掲げた。地域の言語・歴史・文化を保全することは公立大学の使命であり、そのために地域文化継承担当の学長補佐を設置した。

2009年、琉球諸語がユネスコの「消滅危機言語」に指定された。このことは、『琉球文学大系』編集刊行事業が、琉球王朝時代に450年間育まれた言語、歴史、文化、芸能を遺す最後の機会となるかもしれない。そのような危機意識が強く働いたのも

事実である。山里勝己前学長の発案による国際シンポジウム「琉球諸語と文化の未来」が2020年2月15日に名桜大学主催、琉球新報社共催で開催され、琉球文化研究者や琉球諸語を母語とする話者の年齢を考慮すると、編集刊行事業は急務であるとの認識が共有された。『琉球文学大系』は、琉球諸語による初の琉球文学テキスト編纂事業であり、国内はもとよりアジア・ヨーロッパを含めた海外から研究者が沖縄に参集し、研究の活性化につながる。また、編集刊行事業のプロセスは、大学院生をはじめとする若手研究者育成の絶好の機会でもある。これからの琉球文化研究を担う人材の育成も待ったなしである。『琉球文学大系』は、今後の新知見を積み上げていく土台となるであろう。

読者にとって『琉球文学大系』は、沖縄人のアイデンティティーの源泉へと導く道標となるであろう。かつて琉球で語られ、記された言葉を通して、当時の琉球人の精神性や人生観・世界観などに触れることで、今を生きる人々に本来目指すべき価値の再考を促すことになるかもしれない。デジタルトランスフォーメーションによる最適化された新たな沖縄の社会システム構築に欠かせないのが人工知能による数理計算だ。その際に必要となる境界条件は、琉球人の価値に基づいて計算式に投入されるかもしれない。

今後も、この事業を通じて沖縄の文化遺産が次世代に継承され、地域創生やアイデンティティーの形成に役立つことが期待される。さらに、デジタルトランスフォーメーションとの融合を図ることで、沖縄文化研究の新たな地平を切り拓くことが可能になるであろう。

2022年度 下半期業務報告

(10月～3月)

産学連携三者調整会議開催！

『組踊』(上) 納品(9/30)に合わせ、産学連携の三者(名桜大学:編纂/ゆまに書房:出版・販売/沖縄印刷団地協同組合:版下製作)が名桜大学に参集し三者調整会議(10/21)が開かれました。長期にわたる編集刊行事業の三者互惠関係の第一歩として名桜大学を中心とした県内・県外企業との三者調整会議により、それぞれの役割分担と協働事業推進が確認されました。



県内外企業との産学連携三者調整会議、於名桜大学本部棟4階

『琉歌』(上)の編集作業

12月刊行予定を目指していた第3回配本『琉歌』(上)の編集作業は、第1次合宿が11月28日(水)に那覇市内コンドミニウムを拠点に行われました。第2次合宿は12月9日(金)に場所を沖縄高速印刷(南風原町)に移し、校注者、事務局等延べ14名の協力を得て12月15日(木)に無事校了となりました。

「琉球文学大系」編集刊行委員会開催

標記委員会(2023年1月28日開催)において重要議案として協議された『「琉球文学大系」構想の一部変更について』では、全35巻のうち5巻分についての組換等理由が説明され、原案どおり5巻分の組換案が承認されました。

令和4年度「琉球文学大系」全体会議(編集・執筆者会議)開催

1月30日(月)琉球大学構内研究者交流施設・

50周年記念館1階会議室において、編集執筆に当たる校注者を集め全体会議(編集・執筆者会議)が開催されました。出席者は過去最大人数となり、委員23名、関係者8名の計31名が参加して、主に巻担当ごとの進捗状況が報告されました。「編集合宿」の情報共有については直近合宿(『組踊』(上)、『琉歌』(上))の動画(約5分)の上映も行われ、各巻ごとの今後の効率的な編集刊行事業へのご協力と編集作業の勘所について波照間委員長から説明が行われました。



全体会議の様子、於琉球大学研究者交流施設・50周年記念館1階

『おもしろさうし』(下)の編集作業

第4回配本『おもしろさうし』(下)の編集作業は、第1次合宿(1/26～2/9)を経て、第2次合宿(3/1～3/30)は校了まで約1ヶ月を要し、延べ日数は過去最大の1ヶ月半となりました。波照間委員長の半世紀にわたる、おもしろさうし研究の集大成となる同テキストの内容は総ページ800の大著となり編集作業は困難を極めました。その反省点を踏まえ各巻刊行の持続可能性を重視し、次年度からは「年度末3月刊行の前倒しを行い、工程作業を平準化していく」方向性へ転換されました。



過去最長となった合宿の様子(3/11)、於沖縄高速印刷2階

活字の世界（編集者の立場から）

早いもので、編集者としてスタートして40年近くになる。歴史・民俗・文学・字誌・エッセイ集・料理本・絵本等々、自分自身カウントできないくらい、数多くの書籍を編集してきた。

ダメな子ほど可愛いとは、巷間いわれることだが、私もその例に漏れない。組踊が好きすぎて企画・編集した『組踊と沖縄芝居』という本がそれ。「執心鐘入」「孝行の巻」や沖縄芝居5作品を漫画化したもので、発刊記念公演を開催したほどであったが（主催者の特権として、人間国宝になる前の宮城能鳳氏に頼み込んで鬼女を演じてもらった）、見事なまでに売れなかった。組踊や沖縄芝居を漫画化するには時代が早かったと強がってはいたが、絶対売れると思っていただけにショックは大きかった。

そのようなことは、編集者なら誰でも経験していることだが、今の私が編集するならと考えることもない。当時は、組踊関連書が基本文献に限られており、一般読者が楽しく読めるような本がなかったと記憶している。だからこそその漫画本なのだが、活字の世界とはかくも厳しいものなのだ。

今であればどうだろう。

私であれば、琉球文学大系の『おもろさうし』『琉歌』『組踊』を熟読して、企画・編集に当たったに違いない。琉球文学大系は、初心者向けの新しい企画を立てる際に読んでおくと、さまざまな企画を立てることができる膨大かつ深淵な書籍なのだから。

「琉球文学大系」から、さまざまな本が派生して生まれてくることを願っている。本シリーズの編集に携わっている私だが、編集者として、そう考えてしまうほど、魅力的な内容であることは間違いない。

もちろん、産みの苦しみは並大抵のことではない。長い編集者生活の中でも初めて経験することが多いことも、それを物語っている（あまり読者を吃驚させてもいけないので、詳細は割愛する）。

「琉球文学大系」も4年目。まだ先は長い。活字中毒ならぬ、活字偏愛者として、琉球文学の粋ともいえる、本体系シリーズの編集という濃密な時間を過ごしていきたい。

（宮城一春／大系サテライト事務局）

2022年度 寄附者一覧

本年度は下記の個人より寄附をいただきました。厚くお礼申し上げます。

【個人】伊差川則子 瀬名波榮喜

（五十音順・敬称略）

2022年度 図書寄贈者一覧

本年度は下記の個人と機関より貴重な図書資料の御恵贈がありました。厚くお礼申し上げます。

【個人】飯田泰彦（竹富町教育委員会編『竹富町史だより 第48号』他2冊）

渡具知伸（『親泊興照 生誕百年記念芸能祭』親泊興照生誕百年記念芸能祭実行委員会主催）

【機関】石垣市立八重山博物館

（石垣市立八重山博物館『石垣市立八重山博物館会館50周年記念企画展 喜舎場永珣と資料』）

（五十音順・敬称略）

「琉球文学大系」新規関係委員の紹介

本事業の関係委員に、このほど漢那敬子氏（沖縄県教育庁文化財課資料編集班・専門員）が新たに加わりました。漢那氏は第28・29巻『琉球史関係史料』（1・2）を担当します。

「琉球文学大系」関連記事目録—2022年10月～2023年3月

- ・波照間永吉「『琉球文学大系』の完成を目指して」（日本近代文学館 No.310, 2022年11月15日, p9）
- ・田場裕規「＜書評＞『琉球文学大系14 組踊（上）』 新生面を切り開く一書」（琉球新報, 2022年12月4日, 日刊／読書 p17）
- ・北川洋平「琉球の文芸 後生に」（読売新聞, 2022年12月17日, 日刊／地域文化 p27）
- ・宮城一春「画期的な『琉球文学大系』 復帰50年関連書籍も多彩」（琉球新報, 2022年12月23日, 日刊／文化 p10）
- ・月刊やいま編集部「インタビュー 波照間 永吉」（月刊やいま 2023年1/2月合併号 No.341, 2023年1月1日, p5・6）
- ・我部大和「＜書評＞組踊研究の成果を結集」（沖縄タイムス, 2023年1月10日, 日刊／芸能 p15）
- ・藤村謙吾「組踊15作品網羅 せりふ、体系的に解説」（琉球新報, 2023年1月25日, 日刊／芸能 p7）

【事務局だより】本事業に対しこれまで継続して応援くださっている伊差川則子氏より、去る1月30日に開催しました全体会議（編集・執筆者会議）へのサターアングダーの差入れをはじめ、編集合宿への茶菓子やコーヒーなど多くのお心尽しの品が「大系」事務局に届けられました。記して、厚くお礼申し上げます。